

芸術（書道）

1 研究のテーマ

(1) 研究テーマ

臨書における主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の実践

(2) 研究のねらい

本研究では現行の「書道Ⅰ」の指導事項に基づき、行書の単元において身に付けさせたい資質・能力を「行書の用筆・運筆の技法の習得に必要な力」とし、その学習過程を記録できるようなワークシートの作成とICTの効果的な活用について検討を行うことで、指導と評価の在り方について考えた。

2 実践事例

(1) 単元の指導と評価の計画

① 科目名：書道Ⅰ

② 単元名：行書の学習「風信帖」

教材選定の理由として、「行書特有のなめらかな筆の動きのある文字が多い。」「造形に筆づかいが結びついている字形が多い。」ことの二点が挙げられる。

③ 単元の目標：

- ・行書の基本的な点画や線質の表し方を理解し、その用筆・運筆の技法を習得する。
- ・運筆と造形の関係性を理解する。

④ 単元の評価規準 a：関心・意欲・態度 b：思考・判断・表現 c：技能 d：知識

書への関心・意欲・態度	書表現の構想と工夫	創造的な書表現の技能	鑑賞の能力
表現 ・古典の美とその技法に関心をもち、表現技法を高めようとしている。	・漢字の書の美とその技法を学び、普遍性のある表現を工夫している。	・表現技法を高めるために、姿勢、執筆法などの基本的事項を身に付け表している。	・鑑賞と表現は相互に関連していることを理解し、書のよさや美しさを感じ取っている。
鑑賞 ・日本及び中国等の文字と書の伝統と文化について関心をもち、そのよさや美しさを感じ取るうとしている。			

⑤ 単元（題材）の指導計画

○「記録に残す評価」 ●「指導に生かす評価」

次	時	学習内容及び学習活動	評価の観点				評価規準	評価方法
			a	b	c	d		
1	1 ・ 2	○空海と「風信帖」についての基礎的な知識やその価値について理解する。	●				・日本及び中国等の文字と書の伝統と文化について関心をもち、そのよさや美しさを感じ取ろうとしている。 【a 鑑賞】	・ワークシートに記入されたコメント
		・蘭亭序との比較を通して、王羲之からの影響や違いを見つめる。 ○行書の運筆と造形の関係を理解する。 ・「披」の範書を楷書と行書で教員が洋紙に書く。それを見て、点画の連続による筆順の						

		<p>変化や筆の回転や筆圧のかけ方の違いを個人で考える。 →文字の造形との関連に気付かせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・範書を参考に、生徒も洋紙に行書で「披」を書き、筆づかい等を体験的に確認する。 			●		<p>いる。 【d鑑賞】</p>	ト	<ul style="list-style-type: none"> ・提出された作品 ・活動の様子
2 (本時)	3 ・ 4	<ul style="list-style-type: none"> ○「風信帖」から「恩命(集字手本)」を鑑賞し、筆脈や線の抑揚、点画の連続などについて理解する。 ・「恩命」の文字を鑑賞し、臨書の際に特に注意して書くべき点と、どのように書く必要があるか個人で考える。→他者と共有する。 ・注意点を参考に「恩命」を半紙に数回書く。 ・注意すべき点について、どのくらい再現できているか考えたり、どのように工夫して書くべきか意見交換したりして、半紙について相互批評する。 	●		●		<ul style="list-style-type: none"> ・古典の美とその技法に関心をもち、表現技法を高めようとしている。 	ト	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに記入されたコメント ・半紙に記入されたコメント ・活動の様子
		<ul style="list-style-type: none"> ○「恩命」を臨書する。その際、動画を撮影し、自身の筆づかいを見直したり、他者の工夫を理解する。 ・「恩命」の提出用を臨書する。その際動画をペア同士で撮影し合い、筆の運び方や身体の使い方も含め記録する。提出用の作品と動画をもとに振り返りを記入する。 	○		○		<ul style="list-style-type: none"> ・漢字の書の美とその技法を学び、普遍性のある表現を工夫している。 		<ul style="list-style-type: none"> ・作成した動画 (Google Classroomにて収集) ・振り返りのコメント
3	5 ・ 6	<ul style="list-style-type: none"> ○「恩命」を臨書し、清書を完成させる。 ・前時に収集した動画をクラスで共有して、他者の臨書の工夫を確認する。 ・範書の動画を見て、用筆・運筆の振り返りを行い、清書を行う。 ・授業全体の取組みを振り返る。 	○		○	●	<ul style="list-style-type: none"> ・表現技法を高めるために、姿勢、執筆法などの基本的事項を身に付け表している。 ・古典の美とその技法に関心をもち、表現技法を高めようとしている。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートのコメント ・提出された作品 ・振り返りのコメント

⑥ 授業実践例

学習活動（指導上の留意点を含む）	評価の観点（評価方法）
<p>○「風信帖」から「恩命（集字手本）」を鑑賞し、筆脈や線の抑揚、点画の連続などについて理解する。</p> <p>①「恩命」の文字を鑑賞し、臨書の際に特に注意して書くべき点と、どのように書く必要があるか個人で考え、プリントにまとめる。</p> <p>②他者と注意点を共有し、鑑賞を深め、臨書のポイントを設定する。</p> <p>③自身で設定した臨書のポイントに留意して、「恩命」を半紙に数回書いて練習する。</p> <p>④練習した半紙を隣の人と交換し、臨書のポイントについて、どのくらい再現できているか考えたり、どのように工夫して書くべきか意見交換したりして、相互批評する。</p> <p>○「恩命」の臨書動画を撮影し、オンライン上に提出する。</p> <p>①ペアでお互いの臨書の様子をChromebookやスマートフォンを使って動画撮影する。</p> <p>②動画はGoogle Classroomに提出する。互いの動画を共有したり、自身の筆づかいを見直したり、他者の工夫を理解する。</p> <p>③提出用の作品と動画をもとに振り返りを記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに記入されたコメント ・半紙に記入されたコメント ・活動の様子 ・作成した動画（Google Classroomにて収集） ・振り返りのコメント

研究実施校：神奈川県立菅高等学校（全日制）

実施日：令和3年10月27日（水）

授業担当者：田中 咲 教諭

(2) 主体的・対話的で深い学びの視点に基づく指導と評価のポイント

ア 主体的・対話的で深い学びの工夫

本単元では、主な教育活動として、「洋紙への臨書」「文字分析と相互批評」「生徒による臨書動画の作成」の三つを行った。どの活動も行書の運筆と造形の関係を自らの体験や他者との対話・比較を通してより主体的に考え、学びを深めることを目的とした。

「洋紙への臨書」は普段授業で使用している半紙よりも、滑りが良く、墨が紙面に染み込みにくいケント紙を使用することで、筆のなめらかな動きと墨の濃淡の違いから筆圧の変化を視覚的に確認することを目的とした。

行書を学習する際、曲線的な筆の動きや筆圧の強弱をコントロールし、線の太細の変化を表現することは、とても大切なポイントである。しかし、生徒は楷書の直線的な筆の動きや、一定の筆圧で均一な線を書く筆づかいとの違いを理解しないまま、行書の臨書に取り組むことが多い。これにより筆脈や文字の造形的な面白さに気付くことができない場合もある。本単元では、楷書との筆づかいの違いを生徒がより体験的に実感するためにケント紙を使用した。滑りの良い紙によって、なめらかに曲線を書くことができると考えたためである。また、ケント紙はにじまないため、書いた線に濃淡が生まれる。線が太かったり、転折等で筆が止まったりしている部分は筆圧がかかることで墨が濃くなる一方、細い線や運筆が速くなる部分は筆圧がかかっておらず墨が薄くなるのが良く観察できる。これにより筆圧の変化と造形の関係性を視覚的に生徒に気付かせた。

「文字分析と相互批評」に関しては、臨書学習の第一段階で題材となる風信帖「恩命」の二字を段階的に分析できるワークシートを用意した（図1）。文字について抱いた第一印象を要素ごとに分析したり、他者との意見交換を行ったりすることで、文字の鑑賞・分析を深められるように工夫した。ここでの分析をもとに臨書のポイントを生徒自身が設定し、そのポイントを達成できるように学習活動の目的意識を持たせたいと考えた。臨書した半紙は、動画撮影や清書の前にペアで交換し、お互いにアドバイスを書きこむことを「相互批評」として行った。自分の作品を分析すること、他者の作品を鑑賞することが相互に作用することにより、書に関する見方・考え方を養わせることを目標とした。

「生徒による臨書動画の撮影」は生徒の個人のスマートフォン端末やChromebookを利用した。授業内でも教員による臨書動画を教材として活用しているが、生徒が撮影し、自身の筆の動きや

速度感を客観的に観察することをねらいとしている。撮影した動画は、Google Classroomへの投稿により他者と共有し、互いの臨書を比較するなど主体的・対話的で深い学びの一助となることも考えた。



図1 使用したワークシート及び生徒が記述した例

イ 目標に準拠した評価の工夫

① ICTを活用した学習過程の記録を生かした評価

本単元の実践では、提出作品だけでなく、次ごとのワークシートでの振り返りや臨書動画など生徒の学習過程を段階的に保存し、評価に生かすことのできる教材づくりを意識した。特に臨書動画に関しては、ICTを活用したことで筆づかいや速度感などを記録することができた。これまではc「技能」の観点について、作品の完成度から評価をする場合が多かった。しかし、今回のように学習過程の記録にポイントを設定し、授業展開や課題を工夫することで、生徒の変容を見取り、制作途中の作品(図2)や学習に取り組む様子や、単元の目標を実現するために表現の工夫を重ねながら作品を制作していく過程での学習状況を丁寧に見取ることができた。これにより、段階を踏んだ学習活動となったため、生徒も自らの変容を主体的に捉えることができた。自らの課題に気付き、それを改善するためにどのように臨書を行ったら良いかを考えて課題に取り組む生徒が増えたように感じる。

また、芸術科(書道)においては、記録に残す評価とともに、単元の評価規準に照らして実現状況を把握して指導に生かす評価をする場面も特に重視されている。このことについては、本単元においても評価場面を意図的に分けて位置付けており、指導に生かす評価場面を中心に教員が自らの指導の改善に生かすことを意識しながら、適宜個別の生徒への指導に生かすこと等を意識的に行った。

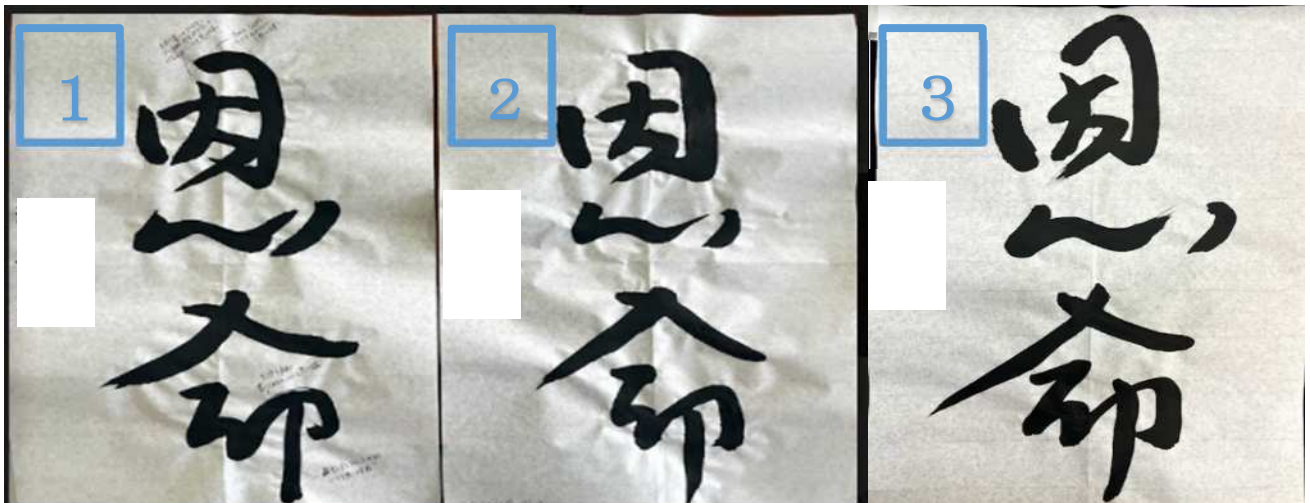


図2 第1次～3次までの生徒の提出作品。
学習活動が進むにつれて、運筆がなめらかになり、造形も整っていく。

② 指導と評価の一体化を目指した授業づくり

本単元の実践の振り返り時に課題として挙げたのは、生徒の考えや気付きを他者と共有したり、教員からの補足のコメントを入れたりするなど、生徒の考えや気付きを一般化する活用の必要性である。さらにルーブリック等の評価基準を提示することも生徒の動機付けと、指導と評価の一体化のために必要であろうとの意見が出た。

ウ 研究協議

本単元の研究協議は、研究実施校での実践の振り返りと、他の教育課程研究推進委員が同じ実践を各自の勤務校で行った際の振り返りを共に行った。このため、本章ではそれぞれの振り返りからICTの活用と、生徒の学習活動の2点についてまとめる。

① ICTの活用について

「生徒による臨書動画」に関しては、実践した際に生徒から次のようなコメントが見られた。

*つなげて書いていない。書くスピードが遅いことに気付くことができた。

*筆先が寝ていて、線が太くなった。友達はスピード感があって滑らかに書いている。

*自分ではちょうどよいスピードで書いているつもりだったが、ほかの人と比べて遅い。勢いが足りない。

以上のように、自分では正しく書いているつもりでも動画として撮影することで、改善点に気付くことができたり、他者との比較を通して、課題に対してどのように修正したらよいかを気付くことができた生徒がいた。(図3)

また清書に向け、「教員による範書動画」を視聴した際に、自身の動画と比較して、

*速度感があるが、とめはねをしっかり書いている。

*筆を立てて書いているのがわかった。

* (自分の) 臨書のスピードが一定で遅かった。バランスを意識して書きすぎていて、筆圧がすべて同じだった。

など、前時よりも行書のポイントに注目し、細部を観察したコメントを述べている生徒が多くなった。

これは、動画を通して他者の書写を見ることを繰り返したことにより、紙面のみでは感じられない速度や勢い、連続する筆の動きに注目できるようになったためと考えられる。

さらに、範書の動画をGoogle Classroomにアップし、生徒自身が清書の練習中に好きなタイミングで繰り返し再生できるよう工夫した学校もあった。これにより、自分の問題意識に合わせて動画でポイントを繰り返し確認することができ、速度感を意識して書くことができるようになった生徒もいた。

担当授業の関係から、書道Ⅱの課題でも動画の撮影を行った学校もあり、上記と同様の感想や変容が見られた。



図3 生徒が撮影した臨書動画からの抜粋

また授業の進行の際に、口頭の説明だけではなく、ICTを用いることで生徒がスムーズに取り組むことができた(図4)。

例えば「恩命」の筆順を考える際にも、かご字をスクリーンに示し、骨書きを書きながら説明することで生徒に分かりやすく示すことができた。(この時には、Jamboardに文字の画像を貼り付け、ペンタブでなぞり書きをしながら説明した。)ワークシートの内容についても今この部分に取り組んでいるのかスクリーンに示すことで生徒に明確に示すことができ、授業がテンポ良く進んでいた。

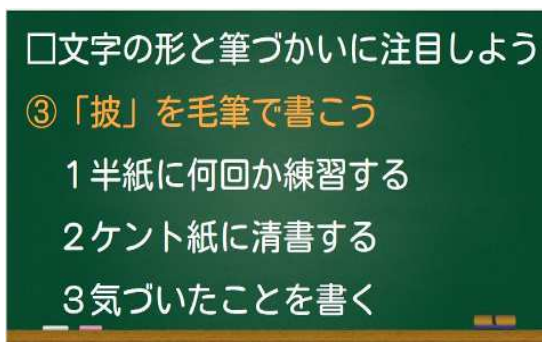


図4 授業内で使用したスライドの一例

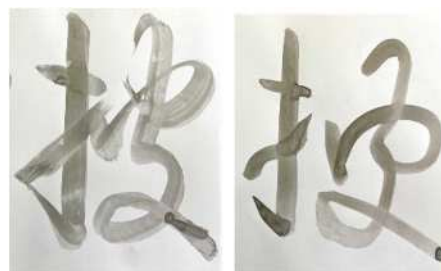


図5 ケント紙で臨書した生徒作品の一例

② 生徒の学習活動について

「洋紙への臨書」は運筆と造形の関係に注目させるために行った。生徒の振り返りでは、

*いつもよりも筆圧を意識することができた。

*紙がすべすべして書きやすかった。

などの感想があり、さらに運筆については、

*抑揚をつけたり、緩急をつけたりすることを「運筆」と言うことを初めて知った。

*硬筆だと字形は考えるけど筆脈や抑揚は表現できないので毛筆ならではのことだなと思いました。

などの感想があり、通常半紙で書くだけでなく用紙の工夫をすることで、筆脈や筆圧の変化をより体験的に伝えることが可能であると考えた(図5)。学校によって、洋紙の種類は様々であったが、滑りの良い紙で数枚書くことで文字の造形と運筆についての関係を意識し、字形が大幅に改善された生徒もいた。

「文字分析と相互批評」に関しては、学習過程を記録できるワークシートを活用することで古典の鑑賞・分析がより明確となり、段階を踏んで考えることにより、古典の特徴がつかみやすくなった。臨書をする際には鑑賞が大切となってくるが、細かく分析し、他者と共有し学び合うことで学習状況の個人差が減り、より深い学習へと導くことができた。他者に自分の考えを説明することで再度古典の特徴について振り返る機会にもなり、適切な言語活動の充実を図ることができた。

相互批評に関しても、他者との対話を通して自身の課題を把握する機会となった(図6)。他者の書

きぶりを見て自分の課題と比較する機会にもなり、より深い学びへと繋げることができた。ペアワークは効果的な場面が多いため、様々な活用を今後更に検討していきたい。

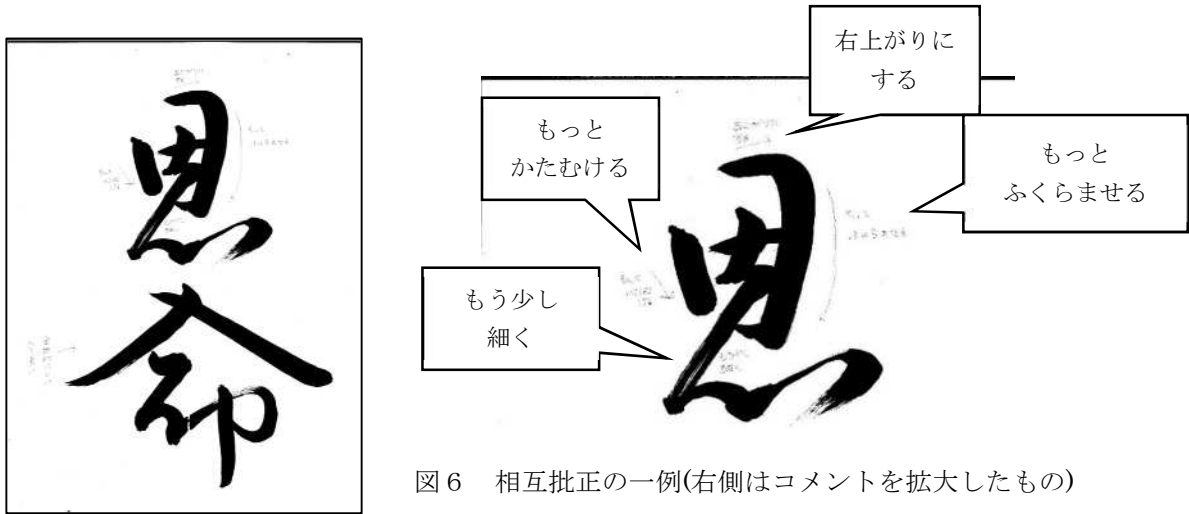


図6 相互批評の一例(右側はコメントを拡大したもの)